



角川文庫

— 259 —

好色一代女

附現代語譯

吉井 勇譯註



角川書店



角川文庫

好色一代女

昭和二十七年二月二十五日 初版印刷
昭和二十七年二月二十九日 初版發行

臨時定價 七拾圓

譯註 吉井 勇

發行者 角川源義

印刷者 川口芳太郎

東京都港區芝三田豊岡町八

發行所

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八

角川書店

落丁・亂丁本はお取替へ致します

好 色 一 代 女

附 現 代 語 譯

吉 井 勇 譯 註



角 川 文 庫

259

好色一代女目次

校註 好色一代女

卷一

老女の隱家
舞曲の遊興
國主の艶妾
淫婦の美形

卷二

淫婦の中位
分里の數女
世間の寺大黒
諸禮女の祐筆

卷三

町人腰元
妖孽寬潤女

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

卷四

調 謹 哥 船
金 紙 七 髻 結
きん かみの はね もと ゆいね

卷五

身 替 長 枕
墨 繪 浮 氣 袖
屋 敷 琢 澁 皮
榮 耀 願 男
み かはりの なが まくら
すみ えの うは きき そで
や しきみ かきの しぶり かは
え えう ねがひ をとこ

卷六

石 垣 戀 崩
小 哥 傳 受 女
美 扇 戀 風
濡 問 屋 硯
いし かけの こひ くら
こ たの でん じゆ せん な
び せん の れん ふう
ぬれ の とひ や すすり

暗 女 畫 化 物
旅 泊 人 詐
夜 發 附 聲
皆 思 謂 五 百 羅 漢
あん ぢよは ひるの けけ もの
りよ はくの ひと たらし
や ほつ の つけ こゑ
みなおもはくの こひやくらん

現代語譯 好色一代女

卷一

卷二

卷三

卷四

卷五

卷六

吉井 勇

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

解説

二五

註校

好色一代女

卷一

目録

老女隱家

〔都〕に是沙汰の女たづねて

むかし物がたりをきけば

一代のいたづら

さりとほうき世のしやれもの

今もまだうつくしき

一 もつばらの評

〔清水〕のはつ櫻に

見し幕のうち

一ふしのやさしき娘いか成人の

ゆかりそ親はく

あれをしらずや祇園町のそれ

今でも自由になるもの

二 「親はないか」ともいふ。劇場におけるほめ言葉。

舞曲遊興

國主艶妾

三十日切の手掛者にはあらず

よしある人の息女も

すゑをたのみにやる事

さては

かりそめに

なるまい

なるともく

望次第

淫婦美形

京のよい中をあらためたる女

嶋原の大夫職の風俗

よしあしのせんぎが

くとい

おもはく丸裸にして語るに

思ひの外なる内證

老女のかくれ家

一 美女は命を斷つ斧と古人もいへり。心^二の花散り、ゆふべの燒木となれるは何れか是をのがれし。されども時節の外^三なる朝の嵐とは、色道^四におぼれ、若死^五の人こそ愚なれ。其の種はつきもせず、人の日^六のはじめ、都のにし嵯峨^七に行く事ありしに、春も今ぞと花の口びるうごく梅津川^八を渡りし時、忼^九げなる當世男の采體^{一〇}しどけなく、色青ざめて戀に貌^{一一}をせめられ、行末^{一二}頼みすくなく、追付け^{一三}親^{一四}に跡^{一五}やるべき人の願ひ、「我萬^{一六}の事に何の不足^{一七}もなかりき。此の川の流れのごとく、契水^{一八}絶ずもあらまほしき」といへば、友とせし人驚き、「我は又女のなき國もがな。其所に行きて閑居^{一九}を極め、惜しき身をながらへ、移り替^{二〇}れる世のさまぐを見る事も」といふ。此の二人生死^{二一}各別のおもはく違^{二二}ひ人命短長の問^{二三}、今に見果^{二四}ぬ夢に歩み現^{二五}に言葉をかはすがごとく、邪氣^{二六}亂つにつて縹^{二七}り行かれし道は一筋の岸根^{二八}づたひに、防風^{二九}筋^{三〇}など萌^{三一}え出づるを用捨^{三二}もなく踏^{三三}分け、里離^{三四}れなる北の山陰^{三五}に入られしに何とやらゆかしく、其の跡^{三六}をしたひしに女松^{三七}村^{三八}立ち萩^{三九}の枯垣^{四〇}まばらに、笹^{四一}の編戸^{四二}に犬のくぐり道のあらけなく、それより奥に自然^{四三}の岩の洞靜^{四四}かに片びさしをおろして、軒^{四五}はしのぶ草^{四六}すぎにし秋の蔦^{四七}の葉殘

一 呂氏春秋に靡曼
 皓齒(美人を云ふ)
 八 生ヲ伐ツ之斧と
 二 花が散つて木の
 枝は薪にされるやう
 三 人の若さもやが
 四 老い衰へて死
 五 至る。五節句の
 一 東方朔の占書に
 三 正月一日龜ヲ占
 一 歳ノ正月七日人ヲ占
 二 八日穀ヲ占フと
 七 正月七日
 八 京外梅津
 四 村を流れる川
 五 當世流行の身な
 六 親に伊達男の跡目
 七 つがせる。親に先
 七 立つて死ぬこと。先
 八 云ふ。精液。腎水とも
 八 人の命に長短の
 差はあるが長つたも
 九 死ぬるときはつたも
 九 であるにない様子。

れり。東の柳がもとに算音（一〇）なしてまかせ水の清げに、爰に住なせるあるじはいかなる御法師ぞと見しに、思ひの外（一）なる女の藤蘭（二）て三輪組（三）、髪は霜を（四）抓つて眼は入かたの月影かすかに、天色（五）のむかし小袖に入重菊の鹿子紋を（六）ちらし、大内菱の中幅帯前（七）にむすびて、今でも此の靚粧（八）さりとては醜くからず。寢間とおもふなげしのうへに瀑板（九）の額掛けて好色菴（一〇）としるせり。いつ焼捨（一一）てのすがりまでも聞傳（一二）へし初音（一三）是なるべし。なほ心も窓より飛びいるおもひに成りて、しばし覗きしうちに最前（一四）の二人の男、案内（一五）しつた顔（一六）に噂も乞はずして入りける。老女（一七）忍笑（一八）みて「けふも亦我を問はれし、世には惱（一九）の深き調諺（二〇）もあるに、なんぞ朽木（二一）に音信（二二）の風、聞くに耳うとく語るに口おもければ、今の世間（二三）むつかしく爰（二四）に引籠りて七とせ、開ける梅唇（二五）に春を覚え、青山（二六）かはつて白雪（二七）の埋む時冬とはしられぬ。邂逅（二八）にも人を見る事絶えたり。いかにして尋ねわたられし」といへば、「それは戀に責められ是はおもひに沈み、いまだ諸色（二九）のかぎりをわきまへがたし。或人傳へて此の道にきたるなれば、身のうへの昔を時勢（三〇）に語り給へ」と、竹葉（三一）の一滴を玉なす金盃（三二）に移し、是非の斷りなしに進めけるに老女（三三）いつとなく亂れて、常弄（三四）し繩（三五）ならして戀慕の詩をうたへる事しばらくなり。其のあまりに一代の身のいたづらさま（三六）くになりかはりし事ども、夢のごとくに語る。「自ら（三七）そもくはいやしからず。母こそ筋（三八）なけれ、父は後花園院（三九）の御時、

一〇 自然に流れ出
 一 上品に蘭の誤
 二 年をいたさま
 三 周防大内家の
 四 唐菱のしやれ
 五 風俗にさらさ
 六 風雨にさらさ
 七 風流な香の立ち消え
 八 香の立ち消え
 九 香の立ち消え
 一〇 香の立ち消え
 一一 香の立ち消え
 一二 香の立ち消え
 一三 香の立ち消え
 一四 香の立ち消え
 一五 香の立ち消え
 一六 香の立ち消え
 一七 香の立ち消え
 一八 香の立ち消え
 一九 香の立ち消え
 二〇 香の立ち消え
 二一 香の立ち消え
 二二 香の立ち消え
 二三 香の立ち消え
 二四 香の立ち消え
 二五 香の立ち消え
 二六 香の立ち消え
 二七 香の立ち消え
 二八 香の立ち消え
 二九 香の立ち消え
 三〇 香の立ち消え
 三一 香の立ち消え
 三二 香の立ち消え
 三三 香の立ち消え
 三四 香の立ち消え
 三五 香の立ち消え
 三六 香の立ち消え
 三七 香の立ち消え
 三八 香の立ち消え
 三九 香の立ち消え

二二 酒の異名。

二三 三味線や琴のやうな樂器。こ、は琴であらう。

二四 立派な素姓。

殿上のまじはり近き人のすゑく、世のならひとておとろひ、あるにも甲斐な
 かりしに、我自然と面子透迤にうまれ付きしとて、大内のまたうへもなき官女
 につかへて、花車なる事ども有増にくからず、なほ年をかさね勤めての後は、
 かならず悪かるまじき身を十一歳の夏はじめより、わけもなく取亂して、人ま
 かせの髪結ふすがたも氣にいらす、つとなしのなげしまだ、隠しむすびの浮世
 髻といふ事も我改めての物好、御所染の時花しも明暮雛形に心をつくせし
 以來なり。されば公家がたの御暮しは哥のさま鞠も色にちかく、枕隙なきその
 事のみ見るに浮かれ、聞くにときめき、おのづと戀を求めし情にもとづく折か
 ら、あなたこなたの通はせ文皆あはれになしく、後は捨置く所もなく、物毎
 いはぬ衛士を頼みてあだなる煙となすに、諸神書込みし所は消えずも吉田の御
 社に散行きぬ。戀程おかしきはなし。我をしのぶ人、色作りて美男ならざるは
 なかりしに、是にはさもなく去御方の青侍、其の身はしたなくて、いやらし
 き事なるに、初通よりして文章命も取る程に次第くに書越しぬ。いつの比か
 もだくとおもひ初め逢はれぬ首尾をかしこく、それに身をまかせて浮名の立
 つ事をやめがたく、ある朝ぼらけにあらはれ渡り、宇治橋の邊に追出されて身
 をこらしめけるに、墓なや其の男は此の事に命をとられし。其の四五日は現に
 もあらず寝もせぬ枕に、物はいはざる姿を幾度かおそろしく、心にこたへ身も

二五 華奢風流な。
 二六 出世する筆の
 二七 髪を出さず結
 二八 後へ倒すやうに結
 二九 黒糸で結ぶ忍び元
 三〇 浮世は當世流行の意
 三一 結の事であらう。
 三二 浮世は當世流行の意
 三三 〇 寛永頃の女院
 三四 染の御所の好みて始め
 三五 染の御所の好みて始め
 三六 〇 色戀に關する
 三七 〇 絶えず。
 三八 〇 宮中守衛の武
 三九 〇 火焚屋で寢火を
 四〇 〇 たいた。
 四一 〇 偽りのないことを誓
 四二 〇 書いた部分。
 四三 〇 あり、京都神樂岡に
 四四 〇 身をまつる。
 四五 〇 身分の低い侍。
 四六 〇 最初の手紙。
 四七 〇 三九 逢ふ。
 四八 〇 千載集、朝ぼ
 四九 〇 三九 逢ふ。
 五〇 〇 だえにあらはれわ

捨んとおもふうちに、又日數をふりて其の人の事はさらにおすれける。是を思ふに女程あさましく心の變るものはなし。自ら其の時は十三なれば人も見ゆるして、よもやそんな事はおもはるゝこそをかしけれ。古代は縁付の首途には親里の別れをかなしみ、涙に袖をひたしけるに、今時の娘さかしくなりて仲人をもどかしく、身拵へ取りいそぎ、駕籠待ち兼ね、尻がるに乗移りて悦喜鼻の先にあらはなり。此の四十年跡迄は女子十八九までも、竹馬に乗りて門に遊び、男の子も定まつて廿五にて元服せしに、かくもまたせはしく變る世や、我も戀のつほみより色しる山吹の瀬くに氣を濁して、おもふまゝ身を持ちくずしてすむもよしなし。

舞ぶぎよくの遊興ゆうきよう

萬上京と下京の違ひありと耳功者なる人のいへり。明衣染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の總角なるふり袖に太鞍の拍子、四條通り迄は靜かにゆたかにいかさま都めきけり。それより下は町筋かぎりて聲せはしく、足音ばたつきかくもかはる物ぞかし。ひとつつつ手も間をよく調子を覚え、すぐれて見えけ

る瀬々の綱代木の歌を利かせてある。

四〇 笹竹に繩をつけてまたがる竹馬。四一 雷の年頃から縁を知り初めて。四二 宇治川にある地名で古來の歌枕。このところ縁語が多く用ゐてある。

一 京都の三條通りを境に、北を上京、南を下京といふ。上京は貴族的な地、下京は商業的地區。二 意。物議りといふ程。三 古今集、小野小町の「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながにせし間に」を利かす。四 七夕踊。七夕の夜から七月の終まで十から十五の少女が襖巻に團扇太鼓を鳴らす。五 小兒の髪を結ひた。方。その子の髪を結ひた。

る人は人の中にての人なり。萬治年中に駿河國あべ川のあたりより、酒樂といへる座頭江戸にくんだりて、屋敷方の御慰に紙帳のうちに入りて、鳴物八人の役を獨して間をあはせける。其の後都にのぼり藝をひろめけるに、殊更風流の舞曲を工夫して人のために指南をするに、小女あつまりて是を世わたりにならへり。女歌舞妃にはあらず、うるはしき娘を此の業に仕入れて、うへつかたの御前さまへ一夜づゝ御なぐさみにあげける、衣髪も大かたに定まれり。紅がへしの下着に箔形の白小袖をかさね、黒きそぎゑりを掛けて帯は三色ひだり繩うしろむすびにして、金作りの木脇差印籠きんちやくをさげて、髪は中剃するも有り、つとして若衆のごとく仕立てける。小哥うたはせ踊らせ酒のあいさつ、後には吸物の通ひもする事なり。諸國の侍衆又はお年よられたるかたを、東山の出振舞の折ふし五七人もうちませたる風情は、また是よりはあるまじき遊興ものぞかし。男ざかりの座敷へはすこしぬる過ぎて見えける。壹人を金一角に定め置きしは、かるゆきなる呼物也。いづれを見ても十一二三までの美少女なるが、よくく是にそまり、都の人馴れて、客の氣をとる事難波の色里の禿よりはかかし。次第におとなしうなりて十四五の時は客只はかへさじ。それも押付業にはおもひもよらず、人の心まかせなるやうにじやつきて、かんのぬれかゝれば手をよくはづし、其の人になづませ「我おぼしめさば、忍び

六 武家をさす。
七 八人藝と呼ばる樂器の曲彈き。

八 女子だけで演じた歌舞伎。寛永年に禁止された。

九 大名などの身高い者の輿方。

一〇、金銀の箔で様を押した白小袖。

一一 半襟。

一二 三色の絲で縫りにした繩帶。

一三 頭の中央部を剃ること。

一四 影を出して、

一五 料理屋などに客を招待すること。

一六 間が抜けて、

一七 一步金貨、

一八 手輕。安直。

一九 この商賣に熟して。

二〇 たくみにかはして。

